



宗祖日蓮大聖人様は、貞応元年二月十六日、今から約七百八十年ぐらい前に、今の千葉県安房郡小湊あわぐんこみなとの漁師の子供として生まれました。

子供のころは善日磨ぜんにちまろと呼ばれていましたが、十二歳の時に勉強をするために清澄寺せいちょうじというお寺に登り、十六歳の時、髪の毛をそり出家して、是生房蓮ぜしようぼうれんちよう長と名乗りました。

それから十四年の間、真実の仏様の教えは何であろうかと知るために、色々なお寺でたくさん問答をしたり、お経文を読んだり、一生懸命に学びました。

そしてとうとう、建長五年四月二十八日、御自身が出家された清澄寺に戻り、南無妙法蓮華經こそ末法で、ただ一つの正しい教えであることを説かれ、名を日蓮と改めました。

以来常に、間違った教えを破折し、妙法を弘教されましたが、そのために迫害の連続でした。

このことは、法華經に「末法の法華經の行者が大難にあう」との予言と全く違ちがわない、一切衆生を救済する末法の御本仏のお姿でありました。

弘安二年十月十二日、日蓮大聖人様は本門戒壇の大御本尊様を顕あらわされて出世の御本懐ごほんがいをとげられ、日興上人様へ仏法的一切を御付嘱ごふぞくされて、弘安五年十月十三日、御歳六十一才をもつて、安祥あんじようとして御入滅されました。

それでは、今から大聖人様の紙芝居を始めます。大聖人様の御一生と一緒に勉強させていただきますしよう。



ここは安房あわの小湊こみなと。

海のすぐ近くに漁師いしやをしている、  
重忠しげただと梅菊女うめぎくによの家がありました。

この家に、男の子が生まれました。  
近所の村の人たちが「おめでとうござ  
います」と、みんなうれしそうに、  
ここに笑顔えがおです。

この時、海中から蓮華れんげの花が咲き、  
家の前では、突然とつぜんきれいな水が湧わき出  
てきました。貞応元年じょうおう二月十六日のこ  
とでした。

男の子は善日曆ぜんにちまると名づけられ、元氣  
に育そだっていきました。

この男の子が後に全世界の人々を幸  
せにして下さる、仏様ぶつさまになろうとは、  
まだだれも知りませんでした。



十二才になった善日磨ぜんにちまるは、世の中の不幸の原因をつきとめようと、学問を志こころざしし、清澄寺せいちょうじというお寺に登りました。

そして、道善房どうぜんぼうという人を師匠ししょうとして「日本一の智慧ちえのある人になりたい」と、常に願いながら、修行と勉強に励みました。



善日曆ぜんにちまるは十六歳の時、疑問ぎもんの解決かいけつと、

真実の道を究きわめるために、頭をそって、

是生房蓮長ぜしやうぼうれんちやうと名前あなを改あらためて、出家い

たしました。

その後も勉強はどんどん進み、さら

に次々と疑問ぎもんが湧わき、より深く勉強す

るために「私はこれからお釈迦様の教

えについて勉強してきます」と、鎌倉

・京都・奈良方面へ出かけていきまし

た。



御経や教えが書かれている本を求め、十四年間にもわたって、比叡山<sup>ひえいざん</sup>などの有名なお寺を訪ね<sup>たず</sup>、多くの僧侶と問答<sup>もんどう</sup>を致しました。

そして、長い間勉強してわかったことは、その時、はやっていた全ての宗教は、お釈迦様の教えに背<sup>そむ</sup>いており、不幸の原因であるということ。

そして、

「お釈迦様の一番の教えは法華経であり、今は、南無妙法蓮華経でなければ人々を救うことはできない、また、自分こそ南無妙法蓮華経の教えをもつて、一切の人々を幸せにするんだ」という強い確信<sup>かくしん</sup>でした。



勉強の旅を終えられた蓮長は、三十  
二歳の時に故郷清澄寺こきょうせいちようじに帰られ、どん  
な大変なことがあっても、南無妙法蓮  
華経の教えを弘めようと誓いました。

そして、夜明け前、山に登り、海が  
よく見えるところに立たれ、昇ってく  
る太陽に向かって、力強く「南無妙法  
蓮華経・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮  
華経」とお題目を唱えられました。

今から約七百五十年前の、けんちよう建長五年  
四月二十八日のことでした。



「蓮長<sup>れんちよう</sup>さんが勉強を終えて、帰ってきたそうだ」

「今日の昼、説法をされるんだって。みんなで聞きに行こう！」

と、集まってきた人々の前で、

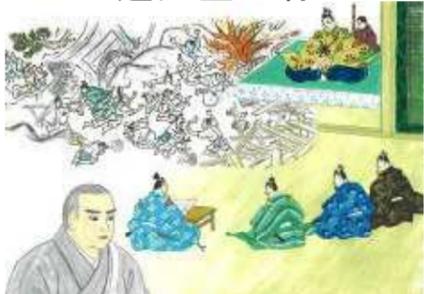
「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経」

と、お題目を唱えて、

「私は、今から日蓮と名乗ります。そして、全ての人々が幸せになれる、ただ一つの教えについて、お話しします。」

と、その当時流行していた、念仏<sup>ねんぶつ</sup>や禅<sup>ぜん</sup>宗<sup>しゅう</sup>等は間違っている、南無妙法蓮華経こそが最高の法である、この教えでのみ、人々は救われることを、力強く話されました。

するとどうでしょう。その場にいた念仏の教えを信じていた者どもが、怒<sup>いか</sup>り狂い、大聖人様に危害<sup>きがい</sup>を加えようと致しました。



このころ、大地震や悪い病気、また、大火事や大雨が次々起こり、災難の連続に人々はみな苦しんでおりました。

大聖人様はその時、鎌倉で教えを弘めておりましたが、

「この不幸の原因は、国中が間違った信仰をしているからです。早く正しい教えを信じなさい」

「南無妙法蓮華経を信じないと、仲間同士の戦いと、他の国が攻めてくる、大きな難が必ず起こる」と、立正安国論を顕し、幕府の指導者をいさめました。

仏法の正義を顕した立正安国論の提出。文応元年七月十六日のことでした。



立正安国論を顕された後も、大聖人様は一時も休まれることはありませんでした。

今夜も松葉ヶ谷の小さな家に、大聖人様を中心に、お弟子たちが集まって、南無妙法蓮華経の教えについて、学んでいました。

「おや？外がさわがしくありませんか？」と、お弟子の一人が気がつきました。

念仏は人を不幸にするといわれた、大聖人様を憎む念仏の信者たちが、松葉ヶ谷の草庵をおそいに来たのでした。

しかし、大聖人様たちは、不思議にキズ一つ負うことなく逃れることができました。



松葉ヶ谷の草庵を焼き打ちされた翌年、再び鎌倉に戻り、より一層折伏弘教に励まれました。

しかし、これを知った鎌倉幕府は、大聖人様を捕らえ、ただの一度も取り調べることなく、伊豆の川奈といふところへ、島流しにしてしまいました。

ところが大聖人様は、

「法華経を仏様の教え通り行っていけば、必ず難にあうのである。これほどの喜びはない」

と、この伊豆流罪を、仏様の教えを正しく行じている証拠であると、喜ばれました。



伊豆に流罪になつた約二年後、本当に罪がないことを知つた幕府は、大聖人様を許し、それによつて大聖人様は、再び鎌倉に戻られました。用事があつて、千葉の方へ行かれたとき、

「工藤殿から、法話の願い出が来ている。みんなも一緒に行きましよう」と、大聖人様一行が、千葉に住んでいた工藤吉隆という御信徒の家に向かわれました。

その時、初めて清澄寺で南無妙法蓮華経と唱えたときから、大聖人様を憎んでいた念仏の信者たちが、小松原というところで待ち伏せして、襲いかかつてきました。

弟子一人が殺され、二人が深い傷を受け、大聖人様も右の額に深手の傷を受け、左手を骨折されました。

小松原の法難。文永元年十一月十一日のことでした。



文永五年、蒙古という国から「言うことを聞かないと攻め込むぞ！」という手紙が届き、大聖人様のいわれる通りになりましたが、まだ幕府は耳を傾けませんでした。

その三年後、雨が全く降らず、幕府が極楽寺良観という人に「雨が降るように祈ってくれ」と、たのんだと言うことを聞いた大聖人様は、仏法の正邪をハッキリさせるチャンスと思い、良観と勝負をしました。

良観は二週間たつても、一滴の雨も降らせることができませんでしたが、大聖人様が祈ると、たちまち雨が降り始めました。この勝負、明らかに大聖人様の勝ちでした。

良観は、おもしろくありません。

大聖人様の悪口を幕府の指導者たちに言いふらししました。それを本気にした者どもが、大勢で大聖人様を捕まえに来ました。

「日蓮はこの国の柱である。柱を倒してもよいのか？」と、厳しくしかりつけましたが、捕らえられてしまいました。しかし大聖人様は何の取り調べもないまま、竜の口の刑場へ連れて行かれてしまい、その知らせを聞き、急ぎかけつけた四条金吾殿が、大聖人様の馬のくつわに取りすがって、泣きながらお供を致しました。文永八年九月十二日のことでした。



竜の口の刑場についても、大聖人様は悠々<sup>ゆうゆう</sup>としておられました。

いよいよ首切り役人が、大聖人様の首を切ろうと、刀を振り上げた、その瞬間<sup>しゅんかん</sup>、空にまぶしい光り物が飛びました。

「あつ、目が見えない……」  
首切り役人はその強烈な光りに目がくらんで、倒れ伏<sup>たお</sup>しました。また、まわりに取り囲<sup>きよ</sup>んでいたたくさんの兵士たちも、恐怖<sup>きょうふ</sup>におののいて、逃げ出しました。

結局大聖人様のお命<sup>いのち</sup>を断<sup>た</sup>つことはできませんでした。

この時、大聖人様が、世界中の人々を救う、本当の仏様、御本仏であることが明らかになったのであります。

大聖人様の数多くの難の中で、一番大事な竜の口の法難でした。



竜の口で大聖人様を殺すことのできな  
なかつた鎌倉幕府の指導者は、今度は  
佐渡へ島流しにしました。

大聖人様は、塚原三昧堂という所に入  
られました。そこはお堂とは名ばかりの、  
小さな、しかも屋根も壁も壊れて、隙間  
だらけで、雪や風が容赦なく入り込んで  
くる粗末なものでした。

しかたなく、蓑を着て、雨や風を防  
がなければなりませんでした。

「お師匠様、暖かいものを差し上げ  
ることができなくて申し訳ありませ  
ん」

そんな中でも、日興上人様は常に大聖  
人様のお側で、一生懸命に御給仕され  
ていました。



佐渡でのお暮らしは大変厳しいものでありました。

その上、島の人々はほとんどが念仏の信者でしたので、常に身の危険にもさらされていました。

佐渡に流された翌年のこと、塚原において、何百人というお坊さんと問答されて、片っ端から、いとも簡単かんたんに、打ち負まかしました。

その堂々とした、そして正しい教えを説そんかれるお姿を通して、大聖人様を尊敬そんけいする者が現れるようになりました。



阿仏房夫妻も、大聖人様を心からお慕いしておりました。

阿仏房も、元は念仏の信者で、塚原で大聖人様をやっつけようとした一人でしたが、逆に折伏され、念仏を捨てて、妻と一緒に大聖人様の教えを信じるようになっていました。

阿仏房夫妻は、人目を避けるように、夜になると、三昧堂で厳しい生活をされて、大聖人様を尋ねて、食べ物などを御供養されていました。

「お二人の真心は忘れませんよ」

と、大聖人様はたいそう喜ばれました。



文永十一年になると、再度蒙古から手紙が届き、さらに、災害が次々に起こり、人々は不安な日々を過ごしておりました。

大聖人様がおっしゃっているとおりになったことで、鎌倉幕府は大聖人様をゆるすことにしました。

「日蓮さまの正しさがわかって、御赦免になったそうだね」  
鎌倉ではこんなうわさがささやかかれていました。

佐渡から帰られた大聖人様は、幕府の指導者に

「間違った宗教を止めなければ、国は滅びる」と、厳しくいさめました。

それでも、幕府は大聖人様のいうことを聞き入れることはありませんでした。



身延の山に入られて五ヶ月後の、  
文永十一年十月、ついに大聖人様の予  
言通りに、蒙古の大軍、約三万人の兵  
士が攻め寄せてきました。

さらに七年後の弘安四年五月にも、  
約十四万の兵士が攻めてきました。

これによつて、多くの壱岐・対馬の  
人々や、大宰府に警備にしていた  
武将たちが討ち死にしました。



大聖人様の南無妙法蓮華經の教えが弘まるにつれて、迫害も強くなりました。

熱原では、日興上人様の折伏弘教によつて、多くの農民が南無妙法蓮華經の教えを信じました。

これを面白く思っていない行智という者は、熱原の法華講衆をいつかやつつけて、ギャフンと言わせてやる。とその機会をねらっていました。

ある日、多くの法華講衆が稲刈りをしているところへ押しかけ、神四郎・弥五郎・弥六郎を代表とする、熱原の法華講衆二十名を捕まえました。



行智ぎょうちは

「神四郎たちが、滝泉寺住職りゅうせんじの田んぼの米を盗んだ」とウソの訴えを起こしました。

その上、この事件を取り調べる役人は、事の真相しんそうには一切触れずに、

「お前たちが唱えている南無妙法蓮華経を捨てて、念仏を唱えるならばゆるしてやろう」

と、おどしましたが、どんなことがあっても、南無妙法蓮華経の信心を止めやてはいけないと、教えられていた神四郎たちは、少しもひるむことなく、より一層強いっそうく、お題目を唱えました。

この御題目の声に激怒げきどした役人たちは、無惨むざんにも、農民の中心者であった、神四郎・弥五郎・弥六郎の三人を殺してしまったのです。

この三人は「熱原さんれつしの三烈士」と呼ばれ、私達信徒の鑑かがみとして称たたえられています。



大聖人様は、入信間もない、熱原の農民たちが、命を落とす大難にあいながらも、正しい信心を守り通した、強い強い信心をござらんになって、いよいよ時が来たことを感じられて、全世界の人々を救済し、幸せに導いて下さるところの、大御本尊様をあらわ顕されました。

弘安二年十月十二日のことでした。こうあん



弘安五年十月十三日、御歳六十一才  
になられた大聖人様は、仏法の全て  
を、第二祖日興上人様にお譲りにな  
つて、御入滅されました。

しかし、大聖人様のお命は、大御本  
尊様として、永遠に私たちを救済して  
下さり、その教えは、日興上人様以来、  
代々の御法主上人猊下様に、一滴も漏  
らすことなく、御相承されて、今日ま  
で、総本山大石寺に守り通してこられ  
ているのです。

又これからも、大聖人様からの血脈  
の流れ通った、猊下様の御指南を拝し  
ながら、どんなことがあっても、大御  
本尊様を求めて、御登山をさせていた  
だき、猊下様のお弟子である、私達の  
お寺の御住職様の御指導を受けて、お  
父さんお母さんの言うことをしつかり  
と聞いて、どんな大変なことにもくじ  
けない、勤行・唱題のしつかりできる  
少年部員になりました。

以上で大聖人様の紙芝居を終わります。